



# N響定期公演感想

交響曲の公演は初めてちゃんとした舞台で観て、貴重な経験でした。舞台の構造から、各々の楽器の配置やカーテンコールなど、大変興味深く感じました。

前半のヴァスクスの作品では、弦楽器による透明感のある純粋な響きが非常に印象に残りました。静かに波打つような繊細な旋律が美しく、心がすっきりと落ち着くような心地よい時間を過ごせました。後半のショスタコーヴィチ『交響曲 第4番』は、オーケストラの巨大な編成から生まれる音の圧力とエネルギーにただただ圧倒されました。鋭い不協和音や、次々と予測不能に変化する激しいリズム、そして各楽器が入り乱れるカオスな展開が非常にスリリングでした。特に、爆発するような激しいクライマックスから一転し、最後は不気味なほど静かに消え入るように終わるコントラストが鮮烈で、音楽そのものが持つダイナミズムと表現の振り幅の広さを肌で体感できた圧巻の演奏でした。

会場には穏やかで落ち着いた雰囲気広がり、演奏者の方々が見事な技術と表現力でこの作品を奏でる姿には深く感銘を受けました。続いて演奏されたショスタコーヴィチの《交響曲第4番 八短調 作品43》は、より躍動感にあふれる音楽の世界へと引き込んでくれました。編成も大きくなり、豊かな響きが会場を包み込みました。西洋クラシック音楽を代表するロシアの作曲家による作品を聴くことができ、大変嬉しく思いました。このコンサート全体の魅力は、その対照的な音楽表現にもあったと感じます。特にフルートが印象的な穏やかな場面から、ゴングが加わることで生み出される力強く緊張感のある場面まで、さまざまな感情や情景が次々と描き出され、聴衆を魅了していました。



# N響定期公演感想

最初の演奏は、作曲者が山あり谷ありのある物語を伝えたかったというのがはっきり分かったし、ヴァイオリニストたちは、ある瞬間には楽器自体が話しているように感じられたんだ。感情の高まりがあり、私も大変に感動した。

日本で初めて行った交響楽団のコンサートでした。チケットを受け取ってからコンサートが終わるまで、すべてが規則正しく整然としていました。本当に楽しく、充実した時間を過ごすことができました。

一曲目と二曲目は雰囲気全然違って、前者はみやびやかな感じで、後者は壮大な感じがしました。

イベント運営が非常に行き届いていました。留学生専用のチケット受取窓口が設けられており、会場内への案内も分かりやすく、とてもスムーズに参加することができました。演奏は厳かな雰囲気と情熱に満ちてました。私は指揮者のアンドリス・ポーガ氏の卓越した指揮に大変感銘を受けました。そして、指揮者という仕事やクラシック音楽についてもっと知りたいと思うようになりました。

一番驚いたのはルールとマナーの数でした。スムーズに行けるようにルールがとても大事だと感じました。





## N響定期公演感想

1曲目は、ヴァスクス作曲《感謝の歌》で、全体を通して非常に柔らかく穏やかな響きが印象的でした。まるで祈りのような静けさと温かさがあり、自然と心が落ち着いていくような感覚を覚えました。

2曲目は、ショスタコーヴィチの《交響曲第4番 ハ短調 作品43》でした。

1曲目とは対照的に、激しく力強く、ときには不穏さすら感じさせるような壮大な曲調で、その圧倒的な音の世界に引き込まれました。

それぞれの楽器が重なり合い、一つの音楽を作り上げていく過程そのものに強く惹かれました。

ショスタコーヴィチとヴァスクスを結びつけるものとして、20世紀における社会主義の経験が挙げられるそうです。

対照的な二人の音楽は、合わせ鏡のように現代社会の混沌を映し出しているようにも感じられました。

演奏者の方々は最後の一瞬まで気を緩めることなく、全神経を集中させて演奏を続けていました。

その姿を見て、「芸術を届ける」ということの重みと凄さを改めて実感し、とても感動しました。

やっぱり音楽って、人を癒やして、結びつける力があるのだと今回の演奏会を通して、その思いを改めて実感しました。

勉強や仕事に追われ、少し疲れていた一週間でしたが、音楽に触れることで心が癒やされて、また頑張れる気がします。

音楽の持つ力の大きさを改めて感じた、貴重な時間でした。



今回、ショスタコーヴィチの公響曲第4番を聴かせていただきました。ショスタコーヴィチと同じ国の出身ということもあり、私にとってとても共感できる作品です。90年前に作られた作品ですが、検閲や発言の制限が強まりつつある現代においても、改めて切実に響く作品ではないかと思いました。また、ペーティス・ワックスの作品は比較的新しい作品で、今回初めて聴きました。「感謝」をテーマにした曲で、希望や光に満ちており、心が癒されました。

